

---

# コロシコロサレコロスカヒ

立花 潮美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プロシプロサレプロスカヒ

### 【Zマーク】

Z1282BA

### 【作者名】

立花 潮美

### 【あらすじ】

殺したい、と願う少女。  
殺されたい、と願う少年。  
そんなふたりの出会いは、必然だったのかもしれない。陰と陽、  
白と黒。ふたりはおたがいに正反対であつたがゆえに、その心をす  
こしづつ重ねていく。

ところが、そんなふたりの周囲で事件が起こりはじめる。その余波が、すこしづつふたりの周囲にも押し寄せてきて……。

高校生の少女と少年が織りなす、シンプルなショートストーリー。

## プロローグ

わたしはひとを殺したいの。

どうして?  
どうして?

ええ、やう。どうしてもよ。この手で、この体で、確實に殺されないといけないの。

どうして?  
何のために殺すの?

自分を生かすために、殺したいの。

ああ、それは良い理由だね。

ありがとうございます。

他のやりかたでは、うまくいかない?

だめだわ。無理ね。

他の手段を、確かめてみた?

ええ、それはもう、ひと通りね。

本当に?

わたしだつて、バカじやないつもつよ。色々と探してみたし、試してもみたわ。

たとえば、どんな？ 教えてもらつても、いいのかな。

話しても良いけど、なぜ聞きたいの？

ぼくにとって、それはとても大事なことだから。物事の過程は重視されるべきだ。

なんで？ そんなに過程が大切かしら？ 結論よりも？

だつて、死という結論は同じでも、殺されたの過程は数多くあるよね？

ああ、わかつたわ。あなたは、どう殺されるか、を気にしているのね。

うん、その通り。わかつてもらえて嬉しいよ。

なあらば、それならOKよ。教えてあげても良いわ。でも、こじじゃいや。

「うんと、他の人に知られてしまうのが、いやなのかな。

わたしは心の秘密を、これから死ぬ人以外に見せるつもりはないの。

了解した。じゃあ、捨てアドを教えるから、それにメールをもらえるかな？

良いけど、この掲示板にアドレスを公開するわけでしょ？

知らないひとが、いたずらでメールを送つておたらどうするの?  
わたしだって、わかるかしら?

わかるよ。だって、ほんへ殺されたいのだから。

ああ、素敵なお答えね。わたし、アキアキしておひつた。

## 第一章 いろしたいの——（一）

すでに、残されている時間は少ない。頃志摩瀕煉は、そう確信していた。

今こうして、黒板の文字をノートに黙々と書き写している間にも、『それ』はガン細胞のように彼女の身体を蝕みつつある。

これは、失われていく感覚だろうか？

それとも、壊されていく感覚だろうか？

いや、違う。本当に怖いのは、そんな感覚ではない。もつとも恥むべきことは、気づかないこと。知らないうちに、こいつそりと置き換えられていること。

毎朝、鏡を見ている自分には、少しずつ起こっている変化はわからない。

『しばらく見ない間に、瀕煉ちゃんはすっかり大人になつたね』久しぶりに会う親戚から、そんな言葉をかけられたとき、瀕煉はすさまじいまでの戦慄を覚える。自覚がないまま『大人』という別の生き物に、瀕煉はなりつつある。気がつかない間に、いちばん大切なものが汚されつつある。

すぐに止めなくてはいけない。一分一秒を争う事態になるかもしないのだ。だからこそ、殺さなくてはいけない。たしかに、その行為は許されないのである。

「別に、構わないけど」

瀕煉は、あっさりと口にした。

その様子を見た友人の己足内心が、ショートカットの髪をわずかに揺らしながら、瀕煉よりも頭ひとつぶん高い長身をかがめたまま、いそいそといつた感じで自分の椅子ごと近づくと、胸に抱え込んでいたお弁当箱を、瀕煉の机の上に置く。

瀕煉は、かるく首をかしげてから訊いた。「心、どうしたの？」

お昼休みに、お弁当と一緒に食べるのは、いつものことじゃない。

わざわざ訊かなくても良いの」「た

「それは口のセリフだよ」心が、上目遣いで潰煉の顔をそつと見つめた。「だって、カレンちゃん、今日ちょっと変じやない？」

潰煉も、鞄から自分の弁当箱を取り出す。「そつ？ 別に何もないけど」

「なら、いいけど……。あ、そつそつ、今日の放課後ね、つきあつてくれない？ あのね、駅の向こうに、新しい小物のお店ができるみたいなの。だからね、口は行ってみたいな。かあいの、いつぱあいあるみたいだよ」

潰煉は、「飯を飲み込んでから言つた。「今日はダメかな」「えー、どうしてえ？」心が、たこさんワインナーをもぐもぐしながら訊く。

無表情で潰煉は答える。「どうしても、よ

「あ、カレンちゃん、やっぱり変なお」心はまだもぐもぐしている。

「そんなに変かしら？」そつこう風に言わると、あんまりうれしくない

「え、でもお、なんかウキウキしてるよつに見えるの。なにかいことあつたあ？」

「気づかれないように、よどみなく箸を動かしてから、潰煉は嘘をついた。「何も」

心は何か言いたそうな顔をしていたが、二個目のたこさんワインナーに箸を伸ばすと、体を丸めて再び上目遣いに潰煉を見ている。心は、潰煉よりも縦に長い体型をしているので、その体勢が潰煉にはひどく窮屈に見えた。

短めの髪といい、スレンダーな体型といい、外見はボーアッシュな感じなのに、心の挙動や言動はひどく女の子っぽい。腕にはめている時計も女児向けのキャラクターもので、どう考えても似合わないのに、心は外そとしない。口では祖母の形見だから、などと言

つているが、あやしいものだ、と潰煉は思っていた。

「どうしても、今日はダメえ？」心が、捨てられた子犬のような田で友人を見つめる。

視線を、窓から見える空の方にそらして、潰煉は答えた。「どうしてもよ。ひとりじゃダメ？ ひとりで行くと、何かまずいの？」

「ほら、だつてブツソウだし」「心が目をうるさい」といふ。

潰煉は目を細めた。「ブツソウ？ 物騒なの？ そういう場所にあるお店なの？」

「うーん、そうじやなくて。ほら、サツジンハンが居るからあ」殺人犯、という言葉に、はじめて潰煉が箸を止めた。「なんで、急にそんなことを？」

「だつて、例の連續殺人事件が起こってるの、陰惨市内だよ？ 近くだよ？ ココロ、ひとりは怖いなあ」「心がおびえる子犬のような顔をしている。

たしかに陰惨市内では、心の言う通り、いささか奇妙な連續殺人事件が発生していた。

殺人は市内の各所で行われ、そして死体がそのまま遺棄されている。

どうやら殺害方法はすべて同じらしいのだが、被害者に共通項がないので、通り魔的な犯行ではないか、と新聞やニュースでは報道されている。加えて死体の損傷が激しいこともあり、猟奇的な要素もあるのではないか、とも噂されている。

潰煉の記憶が間違いでなければ、一週間ほど前にも、とある公園に死体がひとつ転がっていたはずで、新聞やテレビは大騒ぎになつたものだつた。

だが、心はちょっと大袈裟ではないか、と潰煉は感じていた。

「近く、つていうけどさ。事件が起こつてるのは、陰惨市の、けつこう広い範囲でしょ？ 事件の現場になつてる場所は、この高校がある墮胎町からは、ずいぶん離れてたはずだわ」

「あ、意外なの。カレンちゃん、ずいぶんと詳しいんだね」

余計なことを言つてしまつた、と潰煉は内心で舌打ちした。殺人事件に興味を持っていることを、友人の心には知られたくないからだ。

「ごめん、でもやつぱり、今日はひとりで行つてね」  
すこし強引に、話を戻す。大切な約束があることを悟られないよう、潰煉は最大限に表情をコントロールした。

心は子供っぽいくせに、妙なところで勘の良さを見せることがある。時々、根拠もないのに目的を射た指摘をしたり、潰煉の頭の内側を容赦なく覗き込んだりしてくる。そういうことには慣れていたはずだが、今日はその状況は避けたかった。

潰煉はしばらくの間、黙々とお弁当を食べ続けた。

「ふうう」心が、顔の下半分を思い切りふくらませて抗議した。

## 第一章　いろじたいの——（2）

最後の授業が終わるやいなや、頃志摩潰煉は鞄を抱えて外へ飛び出した。

あたりに注意を配りながら駅まで歩くと、いつもとは違う方向の電車に乗る。誰にも見られたくないから、潰煉は歩いていると  
き以上に、周囲を警戒した。

隣町の駅で隠れるように電車を降りると、すぐるような足取りで目的地へと向かう。

陰惨市内でも有数の繁華街である駅前は、他校のものとおぼしき学生服の姿であふれかえっていたが、潰煉の通う高校の指定はありふれたブレザーだったから、まるで木を森に隠すようなものだった。相手が学校帰り、制服のまでの面会を望んだのも、もつともなことだ、と潰煉は納得した。へたに私服でうろつくるよりも、よほど目立たないだろう。

やがて潰煉は、その足をとめた。右手に持っているプリントアウトした地図と、自分の周囲にある風景とを、しばらく交互にながめた後で、ひとつ大きくなづく。

そして意を決して、目の前にある喫茶店へと入っていった。

約束の喫茶店に入った潰煉は、店内をさりげなく見渡した。そこも学校帰りの制服姿であふれていたが、駅前の雑踏とはあきらかに雰囲気がちがっている。

二人用の席が多く存在していて、ほぼすべてに男女のペアが座っていた。席と席のあいだには、観葉植物が置いてある。

店そのものの落ち着いた雰囲気といい、おそらくはカップル御用達の店なのだろう。内緒話をするには、もってこいな感じだった。

そんな中で、ゆるやかに動いていた潰煉の視線が、ぴたりと止まる。

潰煉の目は、驚くほど自然に、ひとりの男子生徒に向けられている。

た。

「ここにでもいるような、普通の少年。中肉中背、髪型も地味。雰囲気も大人しい感じだったが、その目だけがひどく透き通っていた。自分の意思で歩くのではない、そんな不思議な感覚をおぼえつつ、潰煉の足は滑らかに動いて、その男子生徒のいるテーブルの前で止まつた。

「こんにちは」

その男子生徒が、ゆっくりと顔を上げた。その表情に驚いた様子は見られない。

少年が潰煉を見つめていたのは、そんなに長い時間ではなかったが、目の前にいる少女が、掲示板で言葉をかわした相手だ、と確信したようである。

「やあ、こんにちは」男子生徒が、静かに答える。

「頃志摩潰煉です。はじめまして、の方が良かつた？」

「どちらでも。でも、せっかくだから、はじめまして、と言つよ」「おつとりとした口調で男子生徒が付け加えた。「贊望削途です。とりあえず、まず座つて」

言われた通り、潰煉は削途の前に座つた。二人に挟まれたテーブルは店の窓際にあり、そこからは表を歩く人並みが見わたせた。ありがたいことに、外からは店内の様子がわかりにくくなっている。

近づいてきたウエイトレスに、潰煉はレモンティーを注文した。せっかく透き通っている琥珀色の液体を、ミルクで濁らせたくないからだ。一方の削途は、すでに半分なくなりかけているブラックのコーヒーを口に運んでいる。

「もしかして、待つた？ 五分遅れちゃつたし」

「いや、すこし先にきただけ。それに、待つのには慣れているから静かな口調で応じると、削途が穏やかな笑みを浮かべた。「頃志摩さんとは違つて、ぼくの方は待たねばならないから。ある意味、ぼくの人生そのものが、ずっと待つているようなものだよ」

うなずいて、潰煉も笑みを返す。「潰煉、って呼んで。みんなそう呼ぶから」

「では、やうやかでもいいよ。その代わり、ぼくも削途って呼んでほしい」

潰煉は、あたりさわりのない言葉を選んだ。「なかなかに、良い感じのお店ね」

「気に入つてもらえて、良かつたよ。本当は、もっと人気のないところにしようか、とも考えたんだ。ただ、それだと女性である潰煉さんに、無用な警戒心を抱かせてしまうかもしれない、と思つたものでね」削途が、声も表情も柔らかい感じで言った。

小さくうなずいた潰煉の視線は、削途の左手の側、つまり窓側に向けられた。テーブルの上に、地味な装丁の小さな冊子が乗っかっている。

興味津々で、潰煉は訊く。「それ、スケッチブック?」

「うん、たまに絵を描いているんだ。友人に勧められてね。いまも描いて待っていた」

ひとこと断つてから、潰煉は削途が描いていた絵をのぞきこんだ。中央に描かれた直線が、テーブルの横にある窓から見える道路であることは、潰煉にもすぐにわかった。

現実と違うのは、大型のトラックが歩道に突っ込んで、大勢の通行人を踏み潰していることだった。もちろんその多くは学生服姿で、絵の中で見るも無残な姿を晒していた。おそらくは血を表しているのだろう、ペンの黒いインクが道路いっぱいに広がっている。ところどころ、インクが大きな塊になつてているのは、飛び散った肉片を表現しているのかもしれない。

潰煉は正直な感想を述べた。「素敵な絵ね」

「ありがとう」削途が恥ずかしそうに微笑む。

数瞬のうち、潰煉は小首をかしげた。「でも、ちょっと意外。そういう趣味もある人?」

「え? .....ああ、たぶん、勘違いをしているね」今度は、削途が

につっこりと笑つた。「ぼくが居るのは、このトラックの下の方だよ」

潰煉は一度まばたきをした。「なあほど。もしかして、そういうのが理想?」

「うん、そつなんだ」

「すり潰されて、死にたいの?」もちろん周囲に人が居るから、潰煉はささやくような口調になる。「こなごなに、跡形もなく?」

「ちがう」前途が静かに首を振る。「死体のあり方に興味は無い。それは結論だから」

その言い方で、潰煉にも前途の意思が読み取れた。

「あなたは、事故に遭いたいのね。巻き込まれて殺される、そんな死を望んでる?」

「うん、その通り。きわめて理想的な死に方だね」

潰煉はすこしだけ、前途に顔を近づけた。「正直なところ、どうやって話を進めようか、迷つてたのだけど、こんな自然にやりとりができる驚いてるの」

「まあ、それは、掲示板である程度はお互いのことを知っていたからね」

「素晴らしいわ。時間を浪費せずに済むから」潰煉は微笑む。「まず、わたしの方から訊いても良いかしら?」

「良いよ。レディ・ファーストだからね」

「どうして死にたいの?」

潰煉は单刀直入に訊いた。婉曲さのかけらもないその質問の仕方は、潰煉に余裕がないことの表れでもあつたが、もちろん潰煉自身は、そのことに気づいている。

「自分の人生を、シャットダウンしたいからだよ」はつきりと、しつかりとした口調で、前途がどこまでも冷静に応じた。

迷いのない前途の答えを聞いて、潰煉は嬉しくなつた。「続けて」「簡単に言うと、ぼくの人生には、快樂よりも苦痛の方が多い、と理解できたから。だから、生きていても仕方がない、って思えるんだ」

まるで、ひとりのよつよつな口調で削途が続けた。

「生きることは、つらべ、苦しいことだ。喜びや楽しみは、少ししかない。その『くわづかな快樂で、苦痛を『まかしながら過ご』しているだけだ。ぼくたちの世代は、将来に希望はない、と思つ。未来には不幸しかない以上、いまにして自分の人生をやめても、構わないと思うんだ」

潰煉は大きくなずいた。

「その考え方には近いものは、なんとなくわかるわ。自分をとりまく環境が、どんどん悪くなつてゐるのを、肌で感じるから。じつは今がピークで、あとは坂道を転げ落ちてぐだけ、そんな感覚がわたしにあるもの」

「ピークでさえ、この有様だからね。将来は本当にろくでもないよ」「ええ、その通り。未来に希望なんてない。それにこんな風に感じてる以上、きっとピークは中学の頃だったのかもしれない」

潰煉は天をかるくあおぐと、その顔を削途へと向きなおした。「ああ、あなたのお話を聞いてみて、もつひとつ質問が我慢できなくなつてきちゃつた」

「遠慮は要らないよ」削途が笑つた。「ぼくの方は、いくらでも時間があるから」

「じゃあ訊くけど、どうして自殺をしないの?」

潰煉は、真正面から削途の透き通つた目を見すえた。

「削途さん、話を聞く限りでは、あなたはすでに死ぬ覚悟はできてるんでしょう? 自分を自分で殺すのが、もっとも手っ取り早い、と思つんだけど」

予想された質問だつたのだろう、削途の返答はよどみなかつた。

「うん。それはもちろんそうだ。潰煉さんの言つことは正しい。でも、ぼくは自殺をすることで周りの人迷惑をかけたくないんだ。これでも親や友達が、一応いることはいるからね」

削途が再びコーヒーを口に含んだ。その液体は、何も入れなくても黒く濁つてゐる。潰煉の視線にうながされるようにして、削途が

言葉を続けた。

「自殺をしたら、どうなると思う? もうと、親や友達は、責任を感じてしまう、と思うね。親であれば『育て方が良くなかったかもしれない』とか『接し方が悪かったせいにちがいない』とか、そんなふうに、苦しんでしまうかもしない」

削途がティースプーンをくるくると回した。

「あるいは友達であれば『なぜ自分に相談をしてくれなかつたのかとか『どうして気づいてあげられなかつたのか』とか、そんなふうに、悩んでしまうかもしない』

削途の右手がスプーンを回し続ける。

「ほかにも色々と考えられるけど、あげればキリがないかな。つまり、ぼくが自殺をすることで、彼らは自分自身を責めてしまうかもしれないわけだ。そうやって、無実の他人に罪悪感を覚えさせるのは、ちょっと、はた迷惑だと思うんだ」

削途が、いつたん言葉を切ると、表情を少しあらためた。

「もちろんこれには、多分にぼくの『悲観的』観測も含まれているけど。ぼくが自殺をして、『さつさと死んでくれてせいせいした!』とか『あいつがいなくなつてバンザイだ!』とか、そんなふうに考えてくれるのであれば、それはきわめて『楽観的』だね」

潰煉は、ふむふむ、とうなづいた。

「……つまり、自殺という行為をすることだが、周囲に影響を及ぼす、と?」

「うん、そう思う。少なくとも、周囲に居る人たちにとっては、良い意味の影響はないよね。そしてそれは、」

削途の視線が、道路を走るトラックへと向けられた。走り去るトラックに、どこかなり惜しそうな視線を向けながら、ぼそり、という感じで、削途がつぶやいた。

「美しくは、ない。汚らしい人生を歩んでいる以上は、せめて死ぬときくらいは綺麗でありたい、と願うよ」

口を開ざしたとき、削途の瞳は、ひときわ澄みきついていた。

漬煉は、その瞳を覗き込むようにして応じる。

「なあらほど。だから、事故死というのが、あなたにとつての理想的の姿なのね」

「その通りだよ。事故で死ぬことができれば、親や友達は責任を感じずには済むから。そういう意味では、人災よりも天災の方がより好ましいね。死の責任を、ほかの誰にも押し付けようのない状況が良い」

削途が、両手をひろげて、少しあどけてみせた。

「極端なことを言えば、空から隕石が降ってきて直撃死、なんて最高かもしれない。親や友達は、隕石を責めたり告発したりはしないだろう？ 周囲にいる人たちとは、それだけぼくの死を容易に受け入れることができるわけだね」

漬煉は再びうなずいた。

「なんとなく、わかつたわ。あなたの考え方」

「それは……ちょっとずるいかな。ぼくのことばかり、話しているような気がするよ」

## 第一章 いろじたいの——（ 3 ）

ウエイトレスがレモンティーを運んできたので、ふたりの会話は中断した。

頃志摩潰煉は、琥珀色に透き通った紅茶をひとくち飲んだ。レモンのかすかな酸味が、潰煉の感覚を刺激する。贊望前途の視線が、自分の方に向けられるのを待つてから、潰煉は言葉をつむいだ。

「わたしの方は、すごくシンプルなの。結論から言つてしまえば、自分を変えるキッカケ、が欲しかつただけ」

「それは、自分を生かすキッカケ、という意味？」

「ううん、どちらかと言えば、死なないようにするためのキッカケ。なんて言えば良いのか、言葉で説明するのが難しいわ」

潰煉は目をつぶると、慎重に言葉を選び始めた。

「……ええと、わたしはね、ゆるやかに死んでくのがイヤなのよ。いえ、ちがうわ。死ぬのが怖いんじゃない。わたしがいちばん怖いのは、自分の心が、汚されてしまうこと。穢される、いいえ、つくり変えられる、改悪される、と言つた方が良いかもしない」

潰煉は目を閉じたまま、かるく顔をしかめた。

「……汚れた精神をもつたまま生きてくのは、それはある意味で精神的に死んでることと同義だから、そういう感覚では死ぬのを恐れてる、と言つてもよいのかも知れないわ」

潰煉は小さく何度も首を振つた。「ああ、うまく説明できない。自分に腹が立つわ」

「落ち着いて。ぼくは待つているからね」前途の笑みがどこまでも優しい。

潰煉は目を開くと、両手を胸に当てて訴えた。

「……ねえ、わかつてほしいの。わたしが感じてるのは、強い危機感なの。せっぱつまつてるのよ。小学校や中学校のときに感じた

違和感とか、納得いかない気持ちとか、そういうたものが、高校生になつたいま、薄れてきてるわ。ずっとおかしいと思つてたもの、絶対に許せないと感じたものを、いまでは、仕方がないものだ、そういうものだ、つて考えて、なんとなく受け入れてしまつてゐる。受け入れることを、当然のことのようを感じることさえあるわ」

削途が、おつとりとした調子で応じた。

「きみが言いたいことの趣旨は、理解できているつもりだよ。自分自身の個性とか、自分特有の感性とか、そういうものが失われにくこと、それを恐れているんだね」

「そう、なのよ。時がたつにつれて、どんどん、自分自身というものが無くなつてくれみたい。それは汚れていつてるのかかもしれないし、穢されていつてるのかもしない。それが、大人になる、ということのかもしぬいけど、そんなのはイヤなの。このままで、わたしは普通の大人の仲間入りをしてしまう。そんな自分自身がとても恐ろしくてたまらないの。ううん、なんて言えば良いのかしら……」

「お茶を、ひとくち飲んで『じらん』 削途が、みずからもコーヒー・カップを持ち上げて口へと運んだ。「妥協すること、甘受することが、受け入れられないみたいだね」

潰煉は大きくうなずいたあとで、小さく手を振つた。

「あ、でも勘違いしないでね。他人の正しい意見を聞くのは、別に構わないのよ。ただ、洗脳させられるのは、イヤなの。それにいちばん怖いのは、わたし自身がそれを人のせいにしようとしてることなのよ。苦痛を感じるのは『学校のシステムが悪い』とか『家庭環境が悪い』とか、何かに押し付けて、自分自身の責任から逃れようとしてる……」

「それはつまり、他人に責任を押し付ける、他責の考え方といふこと？」

「そう、そうよ……」

声が大きくなつてしまつたのに気づいて、あわてて潰煉は声をひ

そめた。

「まさにその通り。そういう考え方をする人間にだけはなりたくない。絶対にイヤ。そんなことになるくらいなら、死んだ方がまだマシよ」

「周りに、そういう他責の考え方をする人が居るんだね。たとえば、親とか？」

潰煉は、早く小さく息を吸い込んだ。

「さつきから……薄々とは感じてたのだけれど、削途さん、あなた頭の良い人よね」

「そんなこと、ないよ」 削途が静かに首を振る。

潰煉の顔は、すこし赤くなっていた。

「嘘。ちがうわ。受け答えを聞いてればわかるもの。あなた、わたしの言いたいこと、瞬時にまとめてみせてるじゃないの。わたしなんか『殺したい理由』を訊かれる、ってわかつて、昨日の夜から、一生懸命どうやって説明するか考えてたのに、このざまだもの」「ぼくが自分のことをうまく説明できたのは、潰煉さんの訊き方がじょうずだったからだし、ぼくの抱えている理由がきわめてバカげていたから、かもしだれないよ」

潰煉はため息混じりに主張した。

「あなたがバカなら、わたしは大バカ、になっちゃうじゃないの。贊望削途は頭が良い、ってことで良いんじゃないくて？ それにあなたの制服、梅毒高校のものでしょ？ 梅毒高校なんていつたら、このあたりでは有名な進学校じゃない」

「進学校かどうかなんて、意味のないことだよ。少なくとも、人の生とか死にはあまり関連のない、どうでも良いことじゃないかなあ」  
潰煉に軽くにらまれた削途が、苦笑まじりに言うと、手のひらを顔の前にさしだした。

「さあ、気にしないで、先を続けてほしいな」

「……どこまでお話ししましたっけ？」

「他責の考え方はイヤだ、というところまで」

「やう、そうよ、そうだったわね。わたしは、ゆるやかに汚染されてしまうこと、知らないうちに穢されてくことを恐れたわ。そこで、なんとかするために、自分自身を変えるしかない、と思ったの。何かをキッカケにして、生まれ変わるしかない、と思つたわ」

ふたたび削途にうながされて、潰煉は紅茶に口をつけると、乾いた唇をうるおした。

「自分を変えたい、そのキッカケがほしい。そのキッカケは、普通の経験ではダメだったわ。非日常的で衝撃的な体験をして、一気に自分の殻を突き破つてくしかない、と思つたの。それを求めてどんどんと進んでいくて、究極的に、それは禁忌に踏み込むことではないか、という結論にたどりついたの。そしてその答えのひとつが、人を殺す行為だった」

潰煉の赤い舌が、ちらちらと動いて、みずからの下唇をなめた。  
「知らないうちにつくられた『理性という殻』を壊して、内側に秘められた本能を解き放ち、本当の自分自身を体現する。それこそが必要なことであり、殺人行為はそのきっかけとして、まさに相応しい行為だ、と思つたわ」

「うん、うん」削途が繰り返しづなずいた。「殺したい、という潰煉さんの結論は理解できた、と思うよ。ありがとう。……じゃあ今度は、そこに至るまでの過程が聞きたいな」

潰煉は、満足そうに微笑んだ。

そのあとで、形の良いあごに手を当てたまま、潰煉は首をかるくひねった。「掲示板でもそうだったけど、削途さんは、結論よりも過程にこだわるのね」

「まあ、それはそうだね。理由を説明した方が良いかな?」削途がまじめな顔で訊いた。

潰煉は、ふたたび微笑んだ。「ぜひ、お願ひするわ

「うん、了解したよ。理由はふたつあげられるね」削途が胸の前で腕を組むと、手の指を一本立てた。「まずひとつ目は、結論よりも過程の方が重要なのは、当然のことだからだよ。ためしに具体例を

あげてみよつか。たとえば『人を殺してしまった』という結論があるとしよ?」

削途が、ゆっくりと、落ち着いた口調で続ける。

「このとき『完全に偶発的な事故で死なせてしまった』のと『ついカツとなつてうつかり殺してしまつた』のと『はじめから計画して相手を殺した』のとでは、三つとも結論は同じでも、ずいぶん状況がちがうよね? 殺意の有無についてもそうだし、罪の重さについても、ちがいが出てくると思う。これは、結論よりも過程の方が重要な要素である、ということを、如実に表している事例だ、と言えると思う

「ちいさくつなずいている潰煉に、うなずきを返した削途が、一本目の指を立てた。

「ふたつ目は、結論だけを追い求めて、地獄を見てしまつた知り合いがいるからだね」

潰煉のからだが、すこし前のめりになる。「地獄? くわしく聞かせて」

「別に潰煉さんに当てつけるつもりはないから、怒らないで聞いてほしいのだけど……」

削途の左手が、「一ヒーカップを持ち上げる。

「むかし、死を望んだ少年がいた。彼はぼくと同じよひ、殺してくれる相手を探していて、そして見つけた。彼は、自分の望みを叶えようとした。でも実際には、その相手は殺す気などはまったくない、ただのサディストだった」

沈黙を保つている潰煉を見て、削途が「一ヒーをひとくちすすつた。

「彼が発見されたとき、両手両足は、すでに使い物にならなくなっていた。両目もつぶされていた。たぶん、今でも彼は病院にいる、と思うよ、芋虫のような姿でね。歯もすべて折られていたから、舌を噛んで自殺することもできなかつたみたいだ」

削途がカップの中にある、黒い液体の方を覗き込むよひじ

た。

「……まあ、かわいそうだけど、彼自身にも責任はある。彼は、相手の過程を調べておくべきだった、ぼくはそう思っている。動機と目的だけではなく、その途中経過をきちんと確認していれば、相手が、ただの変態的なサディストであることは、分かったはずなんだ」そこで言葉を切ると、削途がさぐるような視線を、潰煉の顔に向けてきた。

「最初にことわったけど、潰煉さんに当てつけるつもりはないからね。すこししか話していないけど、潰煉さんはそんな人ではないと感じている。まちがないなく、きちんと人間を殺すことのできる覚悟を持つた人だ。それは確信に近いものがあるよ」

「うれしいわ。ありがとう」

「どういたしまして」

潰煉が表情をゆるめてみせたので、削途は安心したようである。カップを傾けて、すっかり冷めてしまったコーヒーの、最後の残滓を飲み干した。

## 第一章 いろしたいの——（4）

しばらくのあいだ、静かな時間が流れたあとで、潰煉は慎重に口をひらいた。

「わたしの過程を話すとすれば……そうね、わたしは、自分は簡単に変われるもの、そう思つてたの」

潰煉は人さし指を皿らの唇に当てた。

「ちょっととしたキッカケで、すぐ生まれ変われるものだ、と。たとえば、音楽とか、本とか、人間とか、そんなものと運命的な出会いを果たすこと、一気に何かが目覚めて、新しい自分になれるものだ、と思つてたわ。わたしの中にあるモヤモヤしたものや、わたしをぎゅうっと押し付けてるものが、すべて消し飛んでいく、そんな感覚が得られる、と思つてたの」

「それで、色々と試してみたんだね」

「そう。有名な音楽を聴いてみたり、小難しい本を読んでみたり。あとは、芸術関係にも手を出してみたわ。だつて、よく芸能人とかが言つてるじゃない？『わたしはこの作品と出会えたことで、人間としてひとかわ剥けました』みたいな、そんな感じの。だから、海外のナント力賞をとった映画とか、ベストセラーの泣ける本とか、食い入るように見たりしたの。まったくもつて、ムダだつたけど」「あれつて、見たあと数時間くらいは確かに効果があるよね」「見てるうちにしらけてしまわない場合は、そうね」

「厳しいなあ」削途が吹き出すようにして苦笑した。

「結局、ムダに時を過ごすことになつて、その分だけわたしは汚れてつたわ。あせつて、他のものを手当たり次第に探すことになつた。一応、言つておくけど、本当に色んなことをやつてみたのよ？『話の途中で悪いけど、ひとつ訊いても良いかな』

すぐに潰煉は許可したのだが、削途が妙にまじめな顔で訊いてきた。

「潰煉さんが色々と試した中に、恋愛、つていうものはなかつたの？ 女の子の定番ものとも言えるし、それに、」前途が、真剣なまなざしを潰炼に向けていた。「 その気になれば、きみが恋愛とこゝ選択肢を選ぶこと自体に、それほど困難があつた、とも思えない。客観的に見て、潰炼さんの姿はかなり良い部類に入ると思うよ。お世辞ではなく」

潰炼は、片方の眉だけを上げてみせた。

「恋愛、ねえ……」

「自己変革の手段としては、ポピュラーでお手軽なものだと思つけど」

「それはつまり、セックス、つていうことかしら？」

潰炼は声のボリュームを下げようとしなかつたから、聞いている前途の方が、思わず周囲を確認してしまつたようである。きょろきょろしながら前途が応じた。

「そういう風にとらえてくれても良いけど……」

潰炼は断固とした口調で訊いた。「あれって、何か意味があるのかしら？」

「……うん、まあ、もともとは、子孫を残すための生殖行為だね」「それだけ、でしよう？ わたしの同級生にも経験済みの子はいるけど、それがキッカケで、人間として何か変わつた、とは思えないのよね」

「……うん、でも、目に見えない精神的な部分で、自信がつくかもしれないよ」

「自信？ あんなもので、精神的に変われるの？ 肉体的な快楽を追求することは、精神的な墮落につながるよつにしか思えないけど」「……うん、たしかに、そういう快楽におぼれてしまう人間も、いるかもしないね」

「おぼれる？ 的確な表現だと思つわ、それ。おぼれる、つていうのは、ろくなことじやないでしよう？ お酒におぼれるとか、ギャンブルにおぼれるとか。何かの快樂におぼれるのは、人間としてダメ

メになつていいく、その良い例だと思つわ

「……うん、まあ、そうだね」

前途は防戦じっぽうのはずだが、どにか好奇心を強く刺激されたようである。興味津々といった感じで質問を続けてきた。

「じゃあ、セックスを禁止したらどうかな。そうこう行為なしの、清く正しいおつきあいだけなら、どうなるのかな」

潰煉は、すうっと目を細めた。「そうこうのは、もつとタチが悪いと思つわ」

「良ければ、理由を聞かせてもららえるかな」わくわくした様子で、前途が訊く。

「ひとつでも言えば、やうこりの『洗脳』に近いと思つかい

「……うん？」

「わたしの同級生にも、そんなおつきあいをしている子がいるけどね。そういう子は、セックスという目的の代価として、別の何かを求めようと/orする。おつきあいの結果として、何かしらの形での変化を、無理やりにでも手に入れないと気が済まなくなるみたいね」

潰煉は、感情が声に出ないように努力してつづけた。

「たとえば、男に言われるままに、髪形を変えたり、服装を変えたり、しゃべり方を変えたりする。それで『彼の色に染められちゃつたわ』なんて言って、喜んでるの。そういう変化が、おつきあいによって得られた重要な結果だ、と信じ込んでるのね」

「それが、『洗脳』だと？」

「だって、自分自身を、他人の思うがままに作りかえていくのよ。あれを『洗脳』と呼ばばずして、何と呼ぶわけ？ それに比べたら、まだ猿のようにセックスしている方がマシだわ」

「ふむ、『作りかえていく』か。なるほどね、その発想はなかつたかな」

「だいたい、男の方にしたつておかしいじゃない。その女の子が好きなら、もともとの、ありのままを好きになれば良いのに、あれこれ口を出して改造するわけでしょう？」

「それは人間としてよりも、動物の雄としての、支配欲求のあらわれなんじゃないかな」

「理由なんて、どうでもいいわ。大切なのは、実際にはメリットがない、ということなのよ。だから恋愛は、その子にとつて『洗脳』というより『宗教』に近いのかもね。『恋愛教』に入信して、言われるがままに、自分の姿や考え方を変えてしまつ」

「漬煉さんのお話を聞いていると、『依存』という表現もあてはまりそうだね。つまりセックスという肉体の快楽に依存するか、従属という精神の快楽に依存するか。恋愛は、そのどちらかにならざるを得ない、と漬煉さんは考えているわけだ」

「……あいかわらず、削途さんはまとめるのがうまいわね」

「うん、どうも。まあ、ただ、ぼくは理屈っぽいだけだよ」削途が微苦笑する。「さて、脱線させてしまつたぼくがいうのも変だけど、そろそろ話を元に戻そうか。さつきの続き、最終的には禁忌に踏み込むしかない、と考えた理由を訊いても良いかな?」

漬煉は、恋愛がらみの話で感情的になつていて、ことし自覚していたので、削途のつづってくれた流れに乗ることにした。ひとつ深呼吸をして、自分の考えを整理する。

「……それは、色んなことをやってみて、ダメだったからよ。軽く叩いてもだめなら、もっと強く叩きつけるしかないわ。より強い刺激を与えるしかないでしょ?」

「シンプルだね。そういう理由、ぼくは好きかな。単純なものこそ、本質があるから」

「ありがとう。ああ、ただし刺激つて言つても、ドラッグとかお酒とかは当然ダメよね。自分を生かすための変化を求めてるのに、結果的に自分の体や精神を壊してしまつては、何の意味もないもの」「相手を壊すのは、構わないんだね」削途がほほ笑む。

「わたしが壊したいのは相手の生命だけよ、それも同意つきでね。さつきのサディストみたいに体を壊すことに興味はないし、どこぞの宗教みたいに精神を壊すことにも興味は無いわ」

「それじゃ、もうすこしつつこんだ質問。禁忌の中でも、あえて『殺人』というものを選んだ理由、それを訊いても良いかな」削途の目が、すこし真剣なものになる。

「うん、そうね……。いわゆる禁忌と呼ばれていて、それでいて役に立ちそうなものは、そつ多くはないと思うの。黒魔術とか暗黒儀式、なんていうのはあまりにも非現実すぎるでしょ？ ネクロフィリアとかカニバリズムなんていうのは、ただグロテスクなだけだし」

潰煉は、削途の前で両手を広げてみせた。

「それに、殺人には実績があるわ。歴史上の人物で、人を殺したことがあるけれども、立派な業績を残したひとつて、かなりの人数がいるもの。昔の英雄なんて、みんな人殺しでしょ？ むしろ、数多くの人間を殺したこと自慢して、さらに周囲に評価されている人だっているくらいだわ。だから、殺人は必ずしもマイナスではないと思うの。そういう点も考慮して、わたしは決めたのよ」

「『実績』か、いいね、それ。理屈っぽいぼくは、そういう実際の結果にもどづいた考え方弱いんだ」削途が、うんうんとうなずくと、穏やかに微笑んだ。「どうもありがとう。少なくとも、潰煉さんが今までしてきたことと、その思考経過はわかつたよ。とても、興味深かった」

潰煉も、微笑みを返した。そして自分のティーカップを持ち上げて、その中身がすでになくなっていることに気づいた。代わりに水を口に含んで、そつと周囲を見渡す。

いつの間にか、ずいぶん時間が経っていたようだった。店内の学生服の数は、だいぶ少なくなつていて、窓越しに見える光景も、茜色に染まりはじめていた。

「今日は、こんなところかな」

そう削途がつぶやいて、潰煉も大きくうなづいた。

頃合いだ、という感覚がふたりの中で一致していた。だが削途が伝票に手を伸ばしたので、潰煉はその手を慌てて押さえた。ふたりの手が重なる。

「まつて、それはダメよ。対等な関係でいたいから、ちやんと自分で払うわ」

「ありがとう。じゃあ、あとで清算しよう。」レジ近くが払つてお

くよ

漬煉は嘘偽りなく驚いた。「どうして？　こんなところで見栄を

はるの？」

「そうじゃないよ

削途が静かに首を振つた。

「さつきから見ていい限り、このお店にいた男女のカップルは、ほとんどどが男の方が支払っていたんだ。今ここで割り勘にするのは、ちょっと不自然なカップルだと認識される可能性が高いね。不審な行動を起こして目立つてしまつて、店員に顔を覚えられたりするの

は、得策ではないよ」

漬煉は、削途の言葉の意味をすこし考えたあとで、笑みを浮かべた。「気をつかってくれてるのね、ごめんなさい」

「まあ、ぼくは消える方だから良いけど、きみは残る方だから、証拠のたぐいは残さないように注意した方が良いね」

ふたりは手を重ねたまま、一言二言、言葉を交わした。

具体的な『実行の手法』については、他人に聞かれては困るから、偽名のフリーメールアドレスを使って相談すること。そして、そのメールは削除して一切の記録を残さないこと。携帯電話は、通話履歴などの情報が残りやすいから使わない。

「く自然にふたりの意見が一致して、使い捨てではないメールアドレスを交換した。

店を出て清算を済ませたときには、ふたりの間には不思議な空気が漂つっていた。

「漬煉さん、きみになら、殺されても良いかも知れない」

「削途さん、あなたをなら、殺しても良いかも知れない」

ふたりはお互に微笑みあつた。

## 第一章　いろしたいの——（ 5 ）

喫茶店を出てから、ふたりは人通りの少ない小路を、肩を並べて歩いた。

別れるのが忍びない、そんな奇妙な感情が漬煉の中にうずまいている。前途も黙つてついてきているところをみると、同じ感情を抱いていたかもしだれない。

それは、お互に心中の秘密を暴露しあつたからだろうか？  
それとも、壊されるために築いている関係で、いつか終わりがくるから、一時的に感傷的になつていただけなのだろうか？

そのあたりを、うまく自分の中で整理できないまま、漬煉はゆっくりと歩き続けた。

もう少しこの時間を続けたいところだつたが、それでも、駅へと続く大通りに差しかかつたところで、ふたりが視線を重ねた。これから先は人通りが多くなる。一緒に居るところを見られたくないのでは、このあたりが限界だろう、とふたりは同時に思った。

ところが、別れのあいさつをしようとしたところで、大通りの道近く、ガードレールにもたれているひとりの女の子が目に入った。

別に頃志摩漬煉も贊望前途も、好きで見ていたわけではない。

目に飛び込んでくる、といつた方が正しかつたかもしだれない。  
上半身は、ひらひらとした白のブラウスに、黒っぽいライダースジャケット。下はショツキングピンクのホットパンツに、茶色のウエスタンブーツ。髪は、高く結い上げているように見えた。あまりこのあたりでは見かけない、ちぐはぐなひどいファッショնである。  
おまけに女性にしては背が高いので、よく目立つ。

漬煉は無言のうちに見つめていたが、その女の子が不意に飛び上がるようにして向き直り、こちらへと歩いてくるのがわかつた。どんどんとふたりの方に近づいてきて、思わず漬煉は半歩下がつてしまつたが、女の子は容赦なく接近して、あげくに声をかけてきた。

「こんにちは、ちょっと訊きたいんだけど、いいかな、ね？」

潰煉は周囲に目を向けたが、近くに他に人は居ない。困ったことに、潰煉たちに声をかけてきたようである。

仕方なく潰煉は応じた。「わたしたちに、ですか？」

「そ。他に、いないでしょ？ すぐ済むから。ね？」 女の子が、ちょこんと首をかしげて、髪の毛がふわりと揺れた。

潰煉はその女の子を観察する。

目鼻立ちはかなり整っていたが、美しいというよりは、どちらかというと可愛らしい、という印象を強く受けた。遠目には年下か同年代の少女のように見えたが、近くではそうでないことがわかる。肌の質感から、すこし年上の、十代の後半あたりかと思われたが、正確な年齢が読みとれない。なにより話し方がはきはきとして大人びていて、そのファッションセンスとのギャップを強く感じた。

「仏滅東公園つて、どこにあるか知らない？」

いきなり訊かれて、潰煉は一瞬返答につまつた。

潰煉の記憶がまちがいでなければ、その公園は、一週間ほど前、例の連続殺人事件の、四件目がおこった現場だったからだ。報道や警察の関係者には見えないが、こんな女の子が、わざわざその公園に行きたい、というのはどういうつもりなのか、その意図がわかりかねた。

「ここからだと結構歩きますよ。隣駅からの方が近いです」 潰煉に変わつて、削途があつとりとした声で答える。

「あ、そうなの？ 仏滅町にあるんだ、と思ってたけど」

「たしかに公園自体は仏滅町にありますけど、町の東の端っこなんです。梅毒町との境にある感じですから」 削途がどこまでも冷静に受け答えをしている。

「歩けない距離？」

「結構かかりますよ」

「じゃ、簡単で良いから、道を教えてくれない？ おねがい、ね？」 ポニーテールとは良くなつたものだ、と潰煉は思った。女の子が

『ね?』と言つて首を少しおかしげるたびに、まるで本物のしつぽのように、ふわふわと上下左右に髪の毛が動くのだ。

削途が身振り手振りをまじえて、道順を説明している。女の子は頭のしつぽを揺らしてうんうんとうなづいていたが、説明を聞き終えるとにっこりと笑つた。

「良くなかったわ、どうもありがとう」女の子は両手を胸の前で組んだ。袖の短いジャケットから、ひらひらしているブラウスの飾りがのぞく。「あたしは馬鹿美裂、よろしく

「はあ……」

「デートの最中だったのに、邪魔しちゃって『めんなさい』

「いえ、別にそういうのじゃ、ないですから」潰煉はすこしむつとして答えた。

美裂が、ふたたびにっこりと笑つた。「そう? でもさつき、あなたは『わたしたち』って言つたもんね。つまり、ふたりで一組ということ。そうでしょ、ね?」

小首をかしげてみせると、潰煉の返答を待たずして、美裂は大きく腕を振りながら長い足を動かすと、公園へと向かつて歩き始めた。ブーツがアスファルトとぶつかる、小気味よい音が遠ざかっていく。潰煉は引きつった顔のまま、しばらく動けなかつた。

「見られたのは、ちょっとまずかったかな」削途がぽつりとつぶやく。

潰煉はようやく自分の表情を取りもどした。

「どういう意味? まさか知り合いなの?」

「いや、ちがうよ。ぼくが言いたいのは、誰であれ、ふたりで居るところを見られない方が良い、という意味でだよ。証拠は残さない方が良いから」

「あの女子、あの事件現場の公園に行きたいなんて、いったいどういうつもりなのかしら。何かの関係者には見えないけど……もしかして野次馬?」

「野次馬に行くなら、普通の女の子ならひとりでは行かない、と思

うけれど。まあ何にせよ、見られたものはしょうがない。今後は気をつけるようにしよう」「う

前途の声にうなずきながらも、瀆煉は馬骸美裂の顔を脳内に記憶した。彼女とはふたたび会うことになる、そんな奇妙な予感をうつすらと感じていたからだ。

## 第一章　いろじたいの——（６）

贊望前途と別れたあと、頃志摩潰煉は、駅へと続く道をひとりで歩いていた。

普段は見慣れない、夕日に照らされた町並みをながめながら、ゆつたりとした足どりを保っている。喫茶店に行くときは誰かに見られるのが心配だったが、面会が終わった今となつては、それほど気にならない。この駅の近くの繁華街にある、どこかのお店に用があった、そんな嘘をつけば済むことだつたからだ。

ちょうど会社が終わる時間と重なつたようで、駅前通りにはスレ姿の人間がちらほらと見受けられた。

疲れた顔で、黙々と駅へと急ぐひと。

仲間たちと連れ立つて、飲み屋へと向かうひと。

携帯電話で話しながら、しきりに頭を下げているひと。

ひと。ひと。ひと。それはいわゆる、大人と呼ばれる人間たちだつた。

潰煉は目を細めて、そんな大人たちを見つめていたが、やがてゆっくりと首を振った。どの大人を見ても、自分の未来と重ねることができなかつたからだ。

くたくたになるまで、仕事に根をつめる自分。

同僚との付き合いに、興じることのできる自分。

会社が終わつたあとでも、熱心に仕事にはげむ自分。

将来、あんな風になる。あんな感じに行動できる。それが、潰煉にはまるで想像できなかつた。まるで、別世界の「ひと」のようと思えた。

不意に、すぐ近くからかん高い笑い声が聞こえてきて、潰煉はそちらへと目を向けた。

放課後から今まで、どこかで遊んでいたのだろうか、学生服姿の一团がふらふらと歩いている。彼らが、横一列になつてこちらに向か

つてきたので、潰煉は建物に寄り添うようにして道をゆずった。

女子学生のひとりが、一瞬だけ潰煉に視線を向けたが、すぐに、何もなかつたように談笑に戻つていく。見た目から、高校生らしい、とわかつた。それはつまり、潰煉と同じ身分の存在ということになる。

だがしかし、彼らと同じように振舞うことができる、とも潰煉には思えなかつた。

潰煉は考える。

大人と繋がりがなく、普通の学生とも異質である今の自分は、はたして何者なのだろうか、と。

急に、孤立感と疎外感に背中をそっとさすられて、潰煉は思わず身震いした。

そもそも、潰煉には高校での友だちが少ない。それは部活に入つていなかつたせいもあるだろうが、多分に自分自身の精神構造のせいもあるだろう、と潰煉は考えていた。

中学校の頃は、今のようにではなかつた。それは、潰煉もはつきり覚えている。

他の学生と同じように、テレビのドラマの話で盛り上がり、テストの点数を比べてしゃしがつたり、好みの異性の話で盛り上がり、友だちとケンカして落ち込んだり、ささいなことに一喜一憂していた。

もつと、感情をあらわにしていた、と潰煉は思う。ときおり、社会の仕組みに苛立ちを覚えることはあつても、今ほど神経質にはなつていなかつた。

なぜだろう、とか、おかしいな、と感じ、それを口にすることは数多くあっても、それらを内にこもらせることはなかつた。自分の心中で、ぐつぐつと煮えたぎらせるとはなかつたのに……。

いつからそうなつたのか、どうしてそうなつたのか。まったくわからない。

自分自身に起つていて変化を、潰煉はつかみそこねていた。

潰煉は、中学の頃にくらべて、そこそこ背は伸びた。あまり嬉しくないが、体重も重くなつた。期待したほどではないが、胸も大きくなつた。では、心は？ 精神は？ 大きくなつただろうか。それとも、もうくなつたのだろうか。あるいは、汚れてしまつたのだろうか。

『自分自身の個性とか、自分特有の感性とか、そういうものが失われていくこと、それを恐れているんだね』

『妥協すること、甘受することが、受け入れられないみたいだね』ふつと、前途の言葉が心の中に浮かびあつてくる。前途は驚くほど的確に、潰煉の悩ましい心情を言い当ててみせた。前途の、透き通つた瞳。あの目には、いつたい自分はどう映つていたのだろうか、と潰煉は思う。

「ねえ、ひとり？」

いきなり声をかけられて、潰煉は自分が駅についていたことに気がついた。

「どう？ これからお茶でも飲まない？ いい店知ってるんだけど。それとも、一緒にどこか遊びにでも行こうよ。それがいいって」声の主は大学生くらいの男だった。自分の容姿に自信があるのか、それとも手馴れしているのか、男は当然のような顔で潰煉の行く手をふさいでいる。

しかたなく潰煉は立ち止ると、男を見返した。茶色の長めの髪は無造作にアレンジされていて、耳には銀色のピアスが光っている。顔立ちはまあまあだが、そんなことは関係ない。潰煉は、この手合いがとにかく嫌いだった。特に、潰煉は男の目が気にいらなかつた。奥の方まで濁りきついて、表面にはギラギラとした油膜が浮かんでいる。

その脂ぎった目が、潰煉の顔から胸へ、さらに下腹部へと舐めまわすように移動して、つま先までいつて顔に戻つてきたところで、潰煉は我慢ができなくなつた。

「あなたみたいなひとはね」顔を近づけてきた男の、その目を見す

えて言つ。『生きる価値がないから、さつさと死ねばいいのよ』

「はあ？」

男は潰煉の言葉の意味が理解できないようだつた。

「あなたには、羞恥心のかけらもないわ。よくそんな自分を許せるわね。生きていて恥ずかしくない？ それが理解できないわ。何の目的もなく、何の理想もなく、何の信念もない。あなたみたいな汚れた精神の持ち主はね、すでに精神的に死んでいるようなものよ」

男の顔が引きつるのも構わず、潰煉は続けた。

「なんなら、わたしが殺してあげましょうか？ その汚い目玉をえぐりとつて、口の中に押し込んで窒息させてあげるわ」

あとずさりする男の横を通り抜けると、潰煉は首を振りながら改札へと向かつた。もう一度口の中でつぶやく。

「理解できないわ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1282ba/>

---

コロシコロサレコロスカヒ

2012年1月8日20時52分発行